

トラウマと医療人類学 宮地尚子（一橋大学大学院 社会学研究科 地球社会研究専攻 教授）

1. トラウマとPTSD

なぜトラウマ(心的外傷)を考える必要があるのか。単なる流行語としての扱いを超えて、なぜトラウマに注目しなくてはいいないのか。まず、暴力(戦争・紛争・虐待など)がもたらす心の傷の深さがある。けれどもその傷は目には見えない。また、実際にふられる物理的暴力だけではなく、脅威・脅迫・象徴的暴力の重みも大きい、そういった暴力は目には見えない。さらに、心の傷がさらなる暴力、そしてさらなる心の傷をもたらす可能性も大きい、その連鎖も目に見えない。トラウマを考えるということは、見えない暴力、見えない傷、見えない連鎖を可視化し、予防や被害者の回復支援を考えることにつながる(1)。

ここで、トラウマとは何かを簡単に述べておく。私の理解では、トラウマとは心が耐えられる以上の衝撃であり、なかば不可逆的であって、言葉にならないもの、逃げたくても逃げられないものである。たんにがっかりするとか、プライドが傷つくとかのレベルではないし、「あのことがトラウマになっちゃって」と言葉にできるくらいならトラウマでは(もう)ない。が、どこまでがトラウマではなく、どこからがトラウマかという線引きは困難である。

トラウマに関連してよく議論されるのが「PTSD(心的外傷後ストレス障害)」である。私は、PTSD をクーンのいうパラダイム、もしくは操作的概念として理解すべきだと考えている。プロトタイプとして役立つが、そこから何が洩れてしまうのかも見るのが重要である。

PTSD の特徴を幾つか述べる。

まずPTSDは、「外傷的事件」への遭遇と、「トラウマ反応とされる症状群」がその後存在することによって診断される。そこでは1対1の因果関係が想定されている。しかし人生とは複雑なものであり、たいいていの物事は多要因が関連し合って起こる。原因と結果が相互作用したり、悪循環をおこすこともある。砂山の棒が倒れるときの最後のひとすくい原因なのかきっかけなのか。AがBに暴言をふるいBがAに殴りかかったとき、それは長い葛藤のごく一場面に過ぎなくはないのか。多様な解釈が成り立つ中、PTSDはあえてそこを割り切ろうとする。

つぎに「外傷的事件」の定義である。現在国際的に使われている米国精神医学会の診断基準DSM-IV(2)に従えば、生命や身体の保全に関わる危機への直面という「客観的基準」と、恐怖・無力感・戦慄を感じたという「主観的基準」の双方を満たすと「外傷的事件」とされる。実際にふられる暴力の痛みや傷害、脅威・脅迫による恐怖に重点があることに注目されたい。

「トラウマ反応とされる症状群」は大きく3つに分けられる。再体験(フラッシュバック、悪夢等、症状によって被害を受け続けている状態)、回避・麻痺(思い出すきっかけになるものを避ける、感情をなくす等)、過覚醒(安全な場所でも、緊張、警戒、恐怖反応が続いて、交感神経が昂進、安心やくつろぎの喪失)である。

注意すべきなのが、PTSDだけがトラウマ反応ではないということである。うつ、不安、パニック、強迫などの症状や身体疾患もトラウマ反応としておきやすい。また、感情麻痺、解離、自己破壊的行動(嗜癖、摂食障害、自傷等)など誤解をもたらしやすい症状もしばしばおきる。特に成長期のトラウマや長期にわたるトラウマは、愛着の形成や自己肯定、感情の自己調整、信頼・希望といった生きる基本を崩すことが明らかになっている。これらについては「複雑性PTSD」「発達性トラウマ障害」といった疾患概念が提唱されつつある(3)。

2. 社会・心理・身体の接点としてのトラウマ

私が特に関心をもっているのは、「性暴力はなぜトラウマティックか？」ということである。これは私の臨床が性暴力やドメスティック・バイオレンスの被害者を主に対象にするからであるが、理論的にも非常に重要だと考えている。それは、セクシュアリティが深く生物学的でありつつ、深く文化的でもあるからであり、また性は道徳や宗教と密接に結びついているからでもある。恐怖反応を中心に据えたPTSDパラダイムによるトラウマ理解は不可欠であるが、それだけではすまない複雑さが性暴力にはある。例えばインセスト(近親姦)においては、意味図式やカテゴリーの混乱が引き起こされ、被害者は認知の錯誤や意味のとりちがえを余儀なくされる。意味図式やカテゴリーとは、遠・近、安全・危険、快・不快、清・汚、善・悪、慈愛・搾取、表・裏、公・私といった生き

るための方向付けに不可欠な二分法であり、二分法間の関係である。近いものは安全である、不快であれば遠ざかるといった生物学的なサバイバル・プログラムがそこには含まれる。また性愛、恋愛、親愛、友愛をそれぞれ区別するという、社会的に摩擦を起こさずに生きていくためのルールも含まれる。インセスト被害者はこれらが混線させられ、人間関係にトラブルを起こしやすい。また、セクシュアリティは自己と他との境界領域にあるため、性暴力は自／他という根本的な境界線をも侵す。そして、解離症状（もしくは自己状態群の離散状態）や、自己アイデンティティや記憶の障害を被害者にもたらす。これに関連して最近私が注目しているのが触覚の重要性と、外胚葉由来である皮膚という器官である。このほか、ニューバークのいうように宗教的確信や信念がセクシュアリティを司る脳回路を用いているとしたら、性と聖がなぜ人間の長い歴史の中でしばしば捻れた形で結びつけられてきたかという問いに示唆を与えるように思う(4)。生物学還元主義的な理解では終わりにたくないが。

性暴力の理解においてジェンダーの観点はもちろん不可欠である。男女という区別は生きていく上で基本的なカテゴリーとなっており、人間は男か女のどちらかに身体化されハビトゥスを形成していく。男女という区別は象徴的な意味合いでも用いられ、文化の中で再生産されていく。男らしさは攻撃性と結びつけられ、男性被害者は恐怖を否認せざるをえないし(5,6,7)、女らしさは受動性や被害者性と結びつけられ、女性被害者は怒りを表出することや闘うことを抑制せざるをえないことが多い。ジェンダーやセクシュアリティは、傷つきの中で再生産されていくのである(8,9)。

3. 地球社会とトラウマ

私は精神科臨床の他、社会科学の研究教育にも携わっており、トラウマ概念の持つ政治性や平和への可能性についても考えている。例えば、9.11 やイラク戦争などをめぐるメディア表象のあり方によっていかなる感情操作がおこなわれているのか、どのような集合的記憶や歴史認識がそこから形成されているのか、といった問いである。暴力や加害はなぜ可能になるのか、という問いも重要である。客観的には「加害者」とみなされる人や集団であっても、それぞれ正当化の論理を持っており、自分が加害者だと思っている者は少ない。「強い軍隊」では、思想教育、命令と実行の分離、訓練による馴化、集団化、制服や勲章などを用いた所属感やアイデンティティの付与・強化など、兵士がなるべく個人的にトラウマを負わずにすむような装置が施されている(10)。またシステム化された分業社会においては責任が断片化され、自分の職務に忠実である人ほど構造的暴力を行使してしまう危うさも抱えている。紛争後の真実究明や和解プロセスが注目されているが、真摯な謝罪や補償は容易ではない。人間は本当に自分のふるった暴力や「取り返しのつかない」罪を直視しながら生き続けられるのか、歪曲や否認や解離の機制を抜きに精神はサバイバルできるのかと私は考えてしまう。

トラウマは生きていく上で全く無くすことはできないものであり、暴力の連鎖やトラウマの再生産と共に人間は「進化」してきたとも言える。無くしてすむトラウマは減らしていけるような社会や文化であってほしいが、同時にトラウマを「耕す」ことのできるような社会や文化にしていくことも重要である。それはグローバル資本主義の弱肉強食文化の対極にあり、人間の弱さを認識し、謙虚さ、優しさ、歓待、共有を重視する文化である。また自文化中心主義や二項対立的思想から解放され、多様性や寛容を重視する文化である。アイデンティティの複合性や多層的帰属、文化や言語の混雑性を尊重するクレオール思想、人間中心主義から解放され、人間以外の生命や自然、宇宙への畏敬の念をもつアニミズム思想、事実を受け入れ、自分を越えた大きいものに身を委ね、魂の癒しを重視するシャーマニズムやスピリチュアリティの世界観もここにつらなる。沖縄、アメリカ先住民、アボリジニなどが育んできたこういった文化は、力の論理からの「つけこまれやすさ」も抱えているが、だからこそその価値観を守り育てていく必要がある。

* 参考文献・資料

- 1) 宮地尚子:『トラウマの医療人類学』みすず書房 2005
- 2) 米国精神医学会『統計と診断のためのマニュアル』
- 3) ジュディス・L・ハーマン(中井久夫訳)『心的外傷と回復』みすず書房、1996
- 4) アンドリュー・ニューバーク『脳はいかにして“神”を見るか』PHP エディターズグループ、2003

- 5)リチャード・B・ガートナー『少年への性的虐待－男性被害者の心的外傷と精神分析治療－』作品社 2005
- 6)エレン・ペンス&マイケル・ペイマー『暴力男性の教育プログラム:ドゥルースモデル』誠信書房 2004
- 7)宮地尚子「男制の暴力性とオルタナティブな親密性」情況第三期 6 巻 5 号 p162-171 2005
- 8)宮地尚子編著:『トラウマとジェンダー』金剛出版, 2004
- 9)宮地尚子「支配としてのドメスティック・バイオレンス(DV):個的領域のありか」現代思想 33.10(9 月号)p.121-133,2005
- 10) デーブ・グロスマン『戦争における「人殺し」の心理学』筑摩書房 2004